



TITLE:

<批評・紹介>古代支那史要 岡崎
文夫著

AUTHOR(S):

大島, 利一

CITATION:

大島, 利一. <批評・紹介>古代支那史要 岡崎文夫著. 東洋史研究 1945,
9(4): 257-258

ISSUE DATE:

1945-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145830>

RIGHT:

批評・紹介

古代支那史要

岡崎 文夫 著

A5判二五一頁

昭和十九年四月

弘文堂書房刊

賣價 三圓八十六錢

昨年、支那古代史に關する二つの名著が刊行された。一は内藤湖南先生の『支那上古史』であり、他は岡崎博士の『古代支那史要』である。

内藤先生の學問の高さに就ては既に世に定評のあるところであつて、いまさら私の呟々を要せぬところであるが、岡崎博士の本書に對しても私は一讀ただだ感嘆した。書評を書くやうにと依頼されたとき、私ごとときにはもつてのほかだと私は固く辭退した。ところがすかさず、さういふ名著ならなほさら紹介するのが本誌の義務ではないか、さうではありませんかと切り込まれて、それはさうだと承認させられてはもはや負けである。全く止むをえない。窮したあげく次のやうなことを考へてみた。

内藤先生の支那上古史は膏腴肥沃な土壌の如きものである。それは大正十年ごろの譯義ださうであるから既に二十餘年の昔である。しかし先生の支那古典その他古史資料に對する優れた批判を基礎として縦横に卓拔な史論を展開されたものだけに、

今後と雖も古史研究上缺くべからざる名著である。この膏沃な土壌の上に更にその後發明發見された甲骨文金文の研究或は民族學的研究等の科學肥料を充分に施してそこに豊かに稔つた作物が岡崎博士の本書である。

と私はこんな風に考へてみた。いささか家庭園藝的臭味があつて恐縮だけれども、事實内藤先生の講義に培はれて成長したのが小島・岡崎兩博士らの古代研究であることを思へば必ずしも當らなくはないであらう、などと思ひついたらまゝ一言書いて責を塞ぐことにした。

内藤先生の後、古典に對する批判的研究はいよいよ精細になつたし、新出資料の研究も次第に進歩した。しかし内藤先生の支那上古史ほど統一的な古典批判を基礎とした古代史は今日までの日本には存在しなかつたし、岡崎博士の本書ほど科學的資料が巧みに適用された古代史もなかつたのである。しかも凡人にはどうにもならないのは史眼である。内藤先生の史眼の卓拔さは世に定評がある。岡崎博士が先生に學ばれた第一のことは實にこの點にあらうかと思はれる。

支那古代史といふものは、と私はこの二書を前にして思ふのである——單なる史料の蒐集と羅列とによつて成立するものではない。いかに科學的な資料研究と雖も之を優れた史眼によつて適切に用ひ、更に太陽の如き暖い思索の光りを惜まなく與へなければ豊かな稔りは期待しうものではない。このことは何も古代史に限つたことではないと言はれるであらう。それは

さうに違ひない。しかしそのはげが違ふとは私言ひたい。いつたい歴史研究を最後に價値づけるものは、いはゆる科學的研究ではなくて、もつと精神的なものの人間的なものであらう。さう考へることによつて私は一層勵まされるやうに思ふし、本書の價値もその點においてより高く認め得ると思ふのである。

ひとりよがりのやうな議論を抽象的に、それも大難把にならべてなんだけれども、かういふことを具體的に記すのは簡單にはゆかない。本書を味讀して頂くより仕方がない。たゞ内藤先生から岡崎博士の本書に至るまでの古代史研究の進歩を示す一二の例を擧げてみる。例へば周初克段後の東方經略に就てみると、内藤先生では二三行ですまされてゐる周公の東夷征伐が本書では一章を占め、小川茂樹氏の金文資料による研究に基づいて具體的に展開されてゐるし、また楚の莊王時代の陳の夏姬をめぐる事件にしても内藤先生は左傳の記述を史實として展開されてゐるに對し、岡崎博士は之を西周を亡ぼしたといふ褒姒の因縁話と同様な作り物語りとして意味づけてをられる。こゝに研究法の進歩があると思ふ。

最近の讀書新聞によると、二書とも良書として特に重版されるよしである。一讀といはず精讀されんことをお薦めしたい。以上で拙い紹介を終るが、最後に私の疑問とする一事を述べて博士の高教を仰ぎたいと思ふ。

それは本書一七六頁に、邲の戰の際の楚の軍備に關する宣十二年左傳の記事について、「楚王の統率する中軍に乘廣（兵車）

三十乗を作り、之を左右に分け、……」と述べられてゐる。之によると博士は、「中軍は謀を制する所」であるから、之を楚王が統率しその中に乘廣三十乗を作つてゐたと解せられる如くである。これは勿論論旨にかゝるはるほどの問題ではないけれども、たゞ私は最近別に必要あつて楚の軍備に就て考へた際、實は之とやゝ異なる解釋をしたのである。

顧棟高は春秋楚令尹表鉞（春秋大事表卷二十三）に於て、楚の軍備は分けて二廣となし云々と述べてゐるが、楚の軍備が三軍であつたことは、僖二十八年左傳の城濮の戰の際に楚に中軍と左師と右師とあり、杜預も之を三軍と認めてゐることから明かであり、また宣十二年邲の戰の際にも三軍があつたものと解せられる。又中軍の將は沈尹であつて楚王ではない。とすれば楚王は三軍の上に在つて指揮したものと考えられ、二廣（乘廣三十乗）といふのも中軍に含まれるのではなくて、それは東宮に附屬する宮甲の如く楚王自身の近衛兵（杜注云、君之親兵）であり、楚王は二廣を驅使して三軍を統率したのであらう。従つて楚の軍備は中軍の將が即ち三軍の元帥であるといふ晉の軍制とは異なるものであつたと私は考へたわけである。記して博士の御教示を仰ぐ次第である。（大島利一）